

コロナ禍での地道な活動の報告

JR東日本労働組合第9回定期大会

2020年11月19日(木)、東京都千代田区 Instabase内海において第9回定期大会が開催されました。大会は万全な新型コロナウイルス感染対策をとった上で、傍聴者、来賓を入れずに代議員と執行部、大会役職員のみでの開催となりました。少数での開催となりましたが、各地方からの熱気あふれる発言で、盛会のうちに終了しました。



年末手当、 追加要求方針を全体で確認。

多くの代議員から、年末手当3.0カ月要求に対する会社回答2.2カ月に対して、本部が行った0.8カ月分の追加要求方針を支持する発言が出されました。本部からは「このたたかいは2021春闘を見据えたたたかいである、3回の交渉で終了という、これまでのたたかいに一石を投じた」とたたかいの意義が述べられました。

コロナ禍での運動の成果 秋田地本で1名の加入

各地方からコロナ禍での運動の悩みや、教訓点が出されました。

緊急事態宣言が出され外出の自粛が要請される中、組合活動も停滞を余儀なくされました。そこから、活動を再開するまでの苦労や、感染拡大に配慮しながらの活動の悩み、そしてそれを乗り越えて運動を作り出してきた教訓が発言されました。

そのなかでも、秋田地本では1名の若い仲間が加入してくれたとの報告があり、大きな拍手が湧き起こりました。

交流を地方から作り出す

年末手当の取り組みや、ワンマン運転提案に対する取り組みなどで、地方や職場で他労組と

の共闘をつくりだしてきた実践的な発言がありました。職場に労働運動を残すためにも、「JR労働運動の大同団結・一元化」のためにも学んで行かなければなりません。

東京からは佐藤代議員が発言

東京地本からは、佐藤代議員がコロナ禍でのたたかいの教訓を中心に発言しました。



コロナ感染が拡大するなか、東京地本も代表者会議やレクも中止した。そのようななか、組合員の近況把握行動を組合員と面と向かいながら行ってきた。そして、そこで出された問題を申にして会社と交渉し様々クリアにしてきた。これからもコロナ禍で出来ないこと、出来ること、やらなければいけないことをはっきりさせてやっていきたい。

現職とエルダーが逆転した。将来を見据えてたたかいはやっていかなければならない。グループ会社と一体となって労働条件・労働環境改善をやっていきたい。

以前から提起している「扶養認定範囲の拡大」をぜひ実現したい。